「笹川杯作文コンクール 2009」～中国語で応募～ 第４回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「人を知るように国を知る」

江西省　陳奕紅

一枚の原稿用紙、まだらに錆びたペン、薄暗い電気スタンド、それから、年季が入って壁が禿げた部屋の隅、軋む床板と平凡な人を用意。さあ、我が心を、我が魂を、我が狂気を書き出そう！

話は、友達との解けぬ対立が解けたこと。長年を隔てて改めて振り返ると心悩まされる。あの貴重な体験に全く無関心でいることなど誰ができようか？もし、最初から互いが心の扉を開け放つことができたら、どうなったのだろう？

「あら、今日はスペアリブがまた１元も値上げしている。何日か前は 13 元だったのに、14 元するの！」

向かいから女性の声が聞こえてきて、私は思わず顔を出して覗いてしまった。カーテンを開け放すと小雨がぱらぱらと吹き込んできた。目が少し霞んで、次に聞こえたのは椅子の軋む音だった。

「自分とは関係ない。」私は頭を引っ込めた―2 人の友達を２つの国、例えば中国と日本になぞらえよう。

「後でそれを共同で 1500g ほど買って、少しは安くなるかみてみよう。」

共同で？いい方法だ。国同士の話となれば、“協力”と呼ぶべきだが。中日両国が協力するのはいいことだ。しかし、中国は貧しく立ち遅れており、日本の経済は発達している。中日両国は恨みがとても深く、水と火は相容れない…という人もいるだろう。

８月の雨が縦糸と横糸の交わりのように織りなし、遠くの山が果てしなく広がる。向かいの女性がまた何か言ったが、その声は雨音にかき消されてよく聞こえなかった。よく聞こえる必要もない。風と似た世論のようなものだ。

中日両国の協力に関してまず理解すべきことは、国の特性が人間性と同じであるということ。強者は尊ばれ、弱者は侮られる。毛沢東もかつて「立ち後れれば、殴られる」と言った。今日、スローガンばかりがよく響いているが、もっと必要なのは実現だ。中日が恒久的に協力するためには、まず、中国がよく国を治めて安定させ、国民の資質を高め、経済を繁栄させなければならない。真の意味で都市と農村との格差を縮め、日本や世界中から新しい目で見られる必要がある。

広大な中国には東部の沿海、北京や上海の他に中部や西部、中小の都市もある。人口が多く市場が広大なだけでなく、民族の風情や地方の特色もきっとある。協力に限界はない。両国の権利と利益を損ねさえしなければよいのだ。政治、経済、文化での協力、ハイレベルでの協力、民間での協力、国と地方、地方と地方の協力、どれでもいい。中日両国に広大な協力の余地を作り出すのだ。鷹が自由に旋回する、広々として果てしない天空にも迫る広大なフィールドを。

ある国の生活習慣を知ってこそ、ようやくその国を真に理解することができるのだ。どうにか空いた時間を利用して、ようやく人を理解できることと同じようなものである。通りすがりに聞きつけて、行きずりに話さないこと。そうした言葉は生き生きしているが、自らが体験しなければ、全て信頼するなどできはしない。だから、メディアは、事実に基づいて真実を求めることをやり遂げるべきなのだ。何らかの事柄を美化したり、醜悪に書いたりすることに力を注いではならない。「大衆の目は曇りなく光っている」という諺がある。何らかの手段で愚弄しようとしても、反感を買う

だけだ。恨まれることさえある。生臭い風が一吹きするだけで、社会に動乱が起こる可能性もある。これは、中日両国が何れも正面から向き合い、重視すべき問題だ。中日両国が長期協力を実現するには、即刻、互いを受け入れ、歴史を正視して、風習を尊重するべきだ！

…「新しい落花生ができた。油を搾りに行かないと！」

張婆さんの声だ。目を向けると、雨は止んでいた。向かいのホールは女性でいっぱいになっており、老いも若きも集まってこの上なく賑やかである。私はカーテンを閉めた。部屋は直ぐに暗くなり、思わず笑いがこみ上げた。人と人は、結局、違うものである。

長い川は遠く流れ去り、歳月には形跡もない。私はちっぽけな存在だが、いつの日か、私の予言と夢が、春先の桜のように美しく咲き乱れると信じよう！